

## Y2-04

### 東日本大震災における医療救護班の活動と課題～看護管理者意識調査実施から～

盛岡赤十字病院 看護部  
おいかわ 及川千香子、ちかこ 北村 和子

【はじめに】平成23年3月11日東日本大震災における盛岡赤十字病院医療救護活動概要の中で、今回は看護管理者（医療救護班副班長・看護師長、看護係長）へ活動時意識調査実施結果から、今後日赤岩手県支部および盛岡赤十字病院の災害体制についての課題を報告する。

【目的】災害拠点病院として機能強化するための院内体制検討課題を明らかにする。

【内容】意識調査対象者：看護管理者（医療救護班副班長・看護師長、看護係長）33名

活動内容から：1、初動時期 2、陸前高田第一中学校（以下高田一中と省略）を活動拠点とした継続出勤期 3、高田一中における他医療班カバー時期の3期に分け、自由記載式アンケート実施

【結果】1、アンケート結果をKJ法にて分析し、看護管理者（副班長として）の活動状況と役割認識を明らかにし、今後の課題分析とする。2、日赤岩手県支部および盛岡赤十字病院の災害体制についての課題を考察する。

【考察】院内救急・災害対策委員会では災害時マニュアル整備している。また、平成22年度から赤十字救護看護師教育カリキュラムの見直し、救護看護師登録を日赤岩手県支部と協力を得て積極的に実施してきた。しかし、今回の大震災の規模の大きさと医療救護班出勤期間が長期化していること、地元発生により医療救護班災害対策本部が当院であったという初体験から様々な課題を整理することが必要と考える。

## Y2-05

### 東日本大震災下の陸前高田市における支援者支援

秋田赤十字病院 心療センター<sup>1)</sup>、  
 同救命救急センター<sup>2)</sup>、  
 日本赤十字秋田看護大学<sup>3)</sup>  
まるやま まりこ 丸山真理子<sup>1)</sup>、ふじ 藤田 康雄<sup>2)</sup>、ささき 佐々木亮平<sup>3)</sup>

【はじめに】災害現場においては支援者自身が被災者であり、中長期的な復興に際しては、被災した地元支援者が継続的に活動できることが重要である。被災規模とマンパワーを考えると、掘り起こされてくるニーズに応え続ける現場の負担軽減が急務であり“支援者を支援する”ことが最も必要である。また、救護員の二次受傷を最小限に食い止めるために、院内での支援体制を確立することも非常に重要である。【経過】当院救護班は3/12に陸前高田市で救護活動を開始し、3/15から派遣前の救護班員への心理教育と帰還後のケア体制の整備を開始した。3月下旬から毎週～隔週で現地支援継続中である。

【レベルに応じたケア】被災者に必要なことは、崩壊したシステムを再構築するための手助けであり、個人レベルで行うのが一般被災者へのケア、組織レベルで行うのが支援者へのケアとなる。前者へは、適切な医療の提供と、個々の症状が「異常事態における正常反応」とであると理解し、互いに変化に気づいて助け合うことを促進することが実際のケアとなる。その結果、救援者が替わってもケア継続可能となり、日赤救護班の活動自体が心のケアとなる。一方、トラウマ治療を要する人に対しては、安易な介入がかえって傷を深める恐れもあり、同じ人間が聴き続ける必要がある。

【結語】地元支援者が現場を離れられないのは症状でもあり、誰もが休めるようシステムとして強制的に組み込む必要がある。支援者ケアは短期集中型ではなく、長期継続的に同一チームが同一箇所に関わり続け、高い専門性と共に職業としての関わりを越え「人間として関わる」ことが必要である。その際に、心理的援助をする人員だけでなく、災害時医療に精通した医師、行政システムに精通した保健師等の参加が必須である。